
人生ゲーム

柚樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生ゲーム

【Nコード】

N6851A

【作者名】

柚樹

【あらすじ】

退屈な日々を送る高校生が、ある日不思議なゲームを見つけた。プレイヤー人数は1名の『人生ゲーム』。それは自らがゲームの中で生活する、別の人生を楽しむことが出来るゲームだった。

宮川 潤

誰にでも、『もしあぁだったら』と思ったことはあるだろう。

もし自分が金持ちであったら

もし自分が頭がいい人間だったら

もし自分が美人だったら

もし自分がスポーツ万能だったら

もし自分に積極性があったら

もしこの会社に入社しなければ

そして

もし自分がN高校に合格していれば

今回の物語の主人公は、今年S高校に入学したばかりの男子高校生・宮川潤。

ちよつと癖がある髪質の黒髪で、キリツとした目が印象的な高校生。しかし無愛想だ。

S高の生徒ではあるが、少し違うところがある。

それは彼が無愛想な理由でもある、行きたくて来た高校ではないということ。

潤が狙っていた高校は都内でも有数の進学校N高校。

しかし、結果不合格で滑り止めとして適当に受けたS高校に通うことになってしまった。

この瞬間、潤はやる気を失った。

学校には通うものの、学校での友達も作らず、部活にも入らず、毎日街をふらふらしていた。

当然成績も落ち親から叱咤をくらう。

そんな毎日に嫌気をさすが、何もする気力がない。

潤はベットに大の字になり、呟いた。

「N高校に行きたかったなあ」

合格するもんだと思ってた。

N高に行って生物学学んで、N大で医学部にいつて……。

これが、大まかではあるが俺の人生プランだったのに。

一番腹立つのは親の落胆っぷりだ。

俺は……確かに結果には出なかったが、頑張ったのに。

何であんなに責められなきゃいけないんだ。

「くそっ」

潤は拳に怒りを込め、枕を思いつき殴った。

宮川 潤（後書き）

初めてここに投稿します。

そしてオリジナル小説を書くのも初めて。

初めてづくしですが、よろしければ最後までお付き合い願います。

購入

翌日、いつも通り学校が終わると街に出た。

そして今日はゲームショップに入った。

特に欲しいゲームがあるわけでもない。

ただ見て時間を潰すのだ。

新作コーナーを見て、潤は今どんなものが流行ってるのかと陳列したゲームのパッケージを手に取り、裏のセールスポイントを読んだ。どれもこれも今までに出たことがありそうなゲームだと、無関心にパッケージを戻した。

次に中古ソフトを物色する。

RPG・格闘・パズル・・・どれも惹かれない。

しかし一つ、気になるものがあった。

通常ゲームのパッケージはDVDケースと同じか、少し古ければCDのアルバムのサイズと同じ。

しかしそのゲームはA3用紙位の大きい箱だった。

中古コーナーの片隅に無造作に置かれていたこの箱を、潤は手に取った。

「安・・・980円って。人生ゲーム・・・？」

人生ゲームって、あのスゴロクみたいな、大勢でやるパーティーゲームだよな。

潤は他のパッケージと同じように説明が書いてるだろうと、箱を裏返した。

『もう一つの人生を楽しんでみませんか？どんな人生かはあなた次第』

「・・・これだけ？てか、所詮はゲームだろ？楽しむって・・・」

プレイヤー人数を確認すると、なんと一人だった。

「一人で人生ゲームしろっての？」

潤は失笑した。

しかしそのゲームに惹かれる自分がいた。

人生ゲームだというのにプレイヤーは一人。

そして通常とは違う大きな箱。

重みもある。

普通ではないと潤は感じ取った。

『プレステソフトって2でも出来たよな。』

潤は『人生ゲーム』を購入した。

ゲーム開始

帰宅するとゲームの前に食事を摂った。

親は医者と看護師で滅多に三人揃う事などないのに、ろくに話もせず食べ物を胃袋に流し込むように食べた。

潤は食事を終えたとさっさと自分の部屋へ向かった。階段を駆け上がり、部屋に入るなりドアに鍵をかけた。

『これで邪魔されずにゲームができる』

潤は早速ゲームを開封した。

箱を開けるとシンプルなヘルメットとソフトが入っていた。

ヘルメットの内側に、貫通しているわけではないが直径1mmほどの無数の穴が開いている。

そしてゲーム機のコントローラー同様、長い接続ケーブルがついている。

他には顎下で止めるよう、サイドにマジックテープがついている。

『これを頭に装着するのか・・・』

潤はヘルメットを360°に回し、観察した。

ひとまずヘルメットは横に置き、次に説明書を手にした。

『まず、電源を入れる際、あなたが人生でどうやり直したいか、またどう望んでいたかイメージしてください。

そこがスタートになります。

例えば、“今の自分が美人だったら”と思うと、今の年齢で美人になった自分から人生がスタートします。

他にも、5年前など年数をつけると、ゲームでは5年前の自分からスタートします。

ただし1000年前など、5年後など、生まれていない又はまだ経っていない年数は除外されます。』

つまり、潤の場合“今の自分がN高校に行っていれば”と想像すれば、N高校に通う自分がいるということだ。

『ゲームを終えたければ、ゲームの世界で、このヘルメットを装着してください。

ヘルメットは現実世界でゲームをしている場所と同じ場所にあります。

そうすればあなたの意識は現実世界へ戻ります。』

潤は目を疑った。現実世界に戻ります・・・。

それはどういうことだろうか。

率直にとらえると、自らがゲームの世界に入り込むということだろうが、そんなことはありえるのだろうか。

いや、わかっていたはずだ。

普通のゲームとは違うと感じていたんだ。

潤は続きに目を通した。

『ゲームの世界といっても、人生何が起こるかわかりません。

死んでしまうこともあるでしょう。

しかしご安心ください。

命を落とせばゲームオーバーとみなし、意識は自動的に現実世界に戻ります。

そのため、現実世界でヘルメットは絶対取らないでください。

ヘルメットは命綱のようなものです。』

「死ぬ・・・つつてもゲームだしな。」

潤は説明書を置き、ゲーム機をセットした。

ゲーム機のケーブルをテレビに接続し、コンセントにプラグを差し込み、最後にヘルメットの接続ケーブルを差し込みヘルメットを被った。そして落ちないよう、顎の下でマジックテープをしっかり止めた。ついに電源を入れた。

潤は何度も唱えた。

『N高校に行っていれば。N高校に行っていれば。N高校に行っていれば。』

退屈な授業、煩い親、退屈な毎日がどう変わるのだろうか。

潤は胸を高鳴らせながら唱えた。

そして座ったまま、意識を失った。

ゲームの世界

目を開けると自分の部屋だった。

目の前にはゲーム機がある。

ヘルメットはそのゲーム機の上にあって、頭にはない。

辺りを見回すいつもの自分の部屋だ。

本当に俺はゲームの世界にいるのか？

時刻を確認すると8時だった。

カーテンの隙間から日の光が差し込んでいるということは朝の8時。

俺がゲームを始めたのは夜8時だ。

いや眠っていたら朝になったとか・・・？

潤は疑ってかかったが、すぐに実感した。

ハンガーにかけてある制服がS高校の制服じゃない。

N高校の制服だ。

「そうだ。俺・・・N高の生徒じゃん」

そう認識し、記憶が変換された。

もう自分がS高の生徒だという記憶が、この世界ではなくなったのだ。

「おーいジューン！！早くしろよ遅刻すんぞー」

外から男の声がする。

潤は窓を開けて覗き込んだ。

見たこともない、N高の制服を着た男子生徒が自分と呼んでいる。なのに潤の頭に名前が過ぎった。

「わりい健二！！今きがえっからー！！」

彼は北元健二。

N高で友達になった、今や俺の親友だ。

健二は野球部のルーキーで、高校球児らしい坊主頭が汗と太陽の光で煌いている。

潤の頭に“北元健二”に関する記憶がインプットされた。

着替えを済ませ、扉を開け階段をせわしく下りる。

『本当に自分の家だな・・・』

「潤、朝ごはんはんにこれ、持って行きなさい」

「あ、おはよう」

母親がダイニングから現れた。

手にはサンドイッチをつめたタッパーを持っていた。

そのタッパーを潤に持たせ、笑顔でおはようと挨拶をした。

「まったく、ちゃんと起きなさいよね。

迎えに来てくれる友達がいるんだから。

それから、母さん今夜夜勤だから。

夕飯は作っておくからチンして食べて？」

「ありがとうございます。行ってきます！」

『あれ・・・？』

性格まで変わってしまったようだ。

普段なら、悪態ついて、金を出させ外食するのに。
まるで受験勉強前の自分のようだ。

学校だけでなく、性格・交友関係も変わった。

玄関を開けると、潤は健二とはずっと前から友達だったように挨拶をした。

潤と健二は登校中テレビの話やスポーツの話で盛り上がった。不思議なことに、そういった話題も現実世界と共通していた。

「潤！北元君！おはよう！！」

背後から女の子の声がした。

振り返ると、女の子がセミロングの黒髪を揺らしながら二人に駆け寄ってくる。

N高校の制服を着ている。

息を切らし、頬を染めながら笑顔でまたおはようと挨拶した。

この笑顔がなんて可愛いんだと潤は見とれた。

「朝から走ると気持ち良いね！
で、何の話してたの？」

「他愛もない話だよ。な、潤」

「そうそう。」

「じゃあ私もその他愛のない話に混ぜてよ。」

「いや、俺は先行くわ。」

健二は女生徒と潤を交互に見た。

「じゃな！真央！潤！」

そう言っ て健二は駆けていった。

「なんだよあいつ。」

「北元君、私達に気をつかってくれたのよ」

「え？」

真央と呼ばれた女生徒は潤の手を絡めるように握り締めた。

『もしかして・・・彼女？ そうだ真央は・・・俺の彼女だ。』

向居真央。

彼女とは同じクラスで、入学当初席が前後になったのをきっかけに親しくなった。

そして俺の彼女になったのだ。
新たな記憶がインプットされた。

ゲーム生活

この『人生ゲーム』は本当に『ゲームの中で別の人生を歩む』ゲームだ。

別に武装した敵が出てくるわけでもなく、モンスターが出てくるわけでもなく、それに対抗してこちらも剣を振りかざしたり銃器をぶっ放したりもなく、ただただ平凡な生活をする。

だが潤にはこの平凡な生活が楽しかった。

現実世界も平凡だが、平凡は平凡でも全く違う。

N高校での俺は成績は上位で、部活はやっていない。

だが真央が野球部のマネージャーをしているので、終わるまで図書館で勉強する。

よく健二には

「勉強ばっかやってないで、野球やれよ」

と言われる。そのたびに

「野球ピンポイントかよ」

と、つつこんだ。

部活が終わると真央とファースドフード店で話をしたり、勉強を教えたり、ゲームセンターで遊んだり・・・。

現実世界とは全く違う一日だった。

自分の性格、友達、彼女、学校・・・現実世界にはないものがたくさんある。

まだプレイして一日しか経ってないが、潤はこのゲームにすっかりはまっていた。

まさかこんなゲームがたった980円で手に入るなんて。

本当に買ってよかった。

潤は心底そう思った。

しかしすぐに頭を切り替えた。

どんなに居心地がよくても、ここはゲームの世界だ。

起動したままのゲーム機とヘルメットを見て、戻らないといけないだろうと少し気が重くなった。

現実世界にいたってそんなに楽しいことなどないのに、楽しいゲームの世界の生活を楽しんだ後に現実世界の生活を送らなければならない。

「一応・・・やっぱ戻った方がいいかな・・・」

潤は渋々ヘルメットを手に取り、少し躊躇して被った。
するとまた意識を失った。

意識が失うのは本当にほんの一瞬のものだ。

戻るなり潤は時計を見た。

12時。

部屋は明るいが、外を見るとこの部屋の明かりのせいで景色はうっすら見えるが真っ暗だった。

夜中の12時だ。

ゲームを開始した時間が8時だから、現実世界の4時間が向こうの1日なのか。

潤はゲームのシステムを少しずつ理解し、今日はひとまず終わろうとひとつ風呂浴び眠りについた。

そして改めて思い知らされた。

翌日、潤は現実世界の生活をいつも通り送るものの、やはり今まで以上にやる気がでなかった。

授業を受けていても上の空。

珍しく誰かが話しかけてくれても煩わしいという態度をとる。

潤は早く一日が終わることを願っていた。

さっさとこの現実世界からゲームの世界に移りたいと一日考えていた。

本日の授業が全て終了すると、いつもなら街の仲間とふらふらしているが、今回は足早に家路についた。

家の鍵を開け、誰もいない家に駆け込み靴を脱ぎ捨て階段を駆け上る。

が、一端また下り台所に駆け込んだ。

適当に菓子パンを掴み、缶ジュースを手に取り再び階段を駆け上った。

前回同様ドアに鍵をかけた。

『今日はおふくろも親父も遅いから・・・そうだな。向こうの世界を2日間くらい楽しもうかな』

二日間ということは現実世界では8時間ゲームをプレイすることになる。

そして今の時刻が5時。

潤はヘルメットを装着し、電源を入れた。

潤の意識は再びゲームの世界に飛び込んでいった。

混同

潤の一日のゲーム時間が日に長くなっていった。

徹夜でゲームをするようになったり、授業中熟睡したり、さぼったり、遅刻して行ったり、土日は一日に一度食事を摂りに戻ってくる程度になったりと悪化していった。

2日間部屋から全く出てこないということがないため、親は心配はするものの潤の性格を考えて放っておいた。

そしてある日久しぶりに潤は朝から登校した。

疲れた表情をし、目の下にはクマが出来ている。

爽やかに登校する学生の中、一人大あくびをして登校する。

女子高生の甲高い笑い声や挨拶の声、男子高生の低い笑い声やバカな話が潤には騒音に思えた。

『やっぱ帰りてえ・・・向こうの世界に』

「おはよー!!」

後ろから聞き覚えのある声があった。

後ろを振り返ると向居真央だった。

潤は“おはよう真央”と口を開こうとしたが、言葉をなくした。

真央は潤を通り過ぎ、前にいる男子高校生の背中をバシッと叩いた。

男子高校生が背中を押さえながら振り向いた。

その男子高校生は北元健二だった。

真央は健二の腕にしがみ付き、人目も気にせず並んで歩き出した。

『あいつら・・・!!』

潤は二人を強くにらみ付けた。

だがすぐに冷静に頭を切り替えた。

そう、ここは現実世界。

ゲームの世界ではないのだ。

潤は頭を左右に振り、両側の頬をパンパンと叩いた。

『違う違う。』

ここは現実世界なんだ。

あいつらはこっちでは恋人同士なんだな。

・・・てか俺、やばいな』

現実とゲームの記憶が混同しつつある。

これは重症だと思うものの、頭の中にはゲームのことばかりだった。

逆にゲームの世界に來ると、現実世界のあの光景ばかり頭に浮かんだ。

どうしてもゲームの世界の二人と重ねてしまう。

今健二の部屋のベットでゴロゴロとくつろいでいても、くつろいでいる気がしない。

気になって仕方がない。

現実世界があれだから、ゲームの世界では違う―とは限らない。

潤は単刀直入に聞いた。

「なあ健二、真央と・・・真央と付き合ってるってことはあるか？」

声が少し小さくなってしまった。

「ん？何か言ったか？俺と真央が何？」

健二は漫画雑誌を読みながら素っ気無く返事をした。

潤はなんとなく、もう一度同じ質問を口にするのが嫌だった。
「というか聞いても意味がないと思った。」

真央の彼氏本人を目の前にして、“実は真央と付き合ってます”なんて言うわけがない。

「いや、なんでもない。」

と潤は漫画に目を向け、小さな声で素っ気無く返した。

裏切り（前書き）

グロいシーンが苦手な方には大変申し訳ないです；
過激ではありませんが・・・ちよいぐろです。

裏切り

潤は真央と健二を張り込むことにした。

俺は真央と健二にわざとそっけない態度をとって避けた。

もし二人が付き合ってるなら、俺の目が真央にいていない時に会うだろうと考えた。

二週間ほど張り込めばわかるかもしれない。

潤は滞在期間最長記録7日間つまり現実世界では1日と4時間一を抜き、18日間一現実世界では3日間一ゲームの世界に滞在することにした。

本当は何もなければいいと願いながら、毎日二人の動向を監視した。そして監視15日目、その光景を目の当たりにしてしまった。

学校の帰りだろうか、夜の公園のベンチに座り、寄り添う二人。

そして軽くキスを交わす。

潤はその光景を、ベンチの後ろにある茂みに隠れて覗き見ていた。

怒りで握り締めた拳から血が滴り落ちる。

爪が手のひらに食い込んでいることも感じさせないほど怒りに満ちていた。

そしてその怒りが爆発する決定的なことが起こった。

「潤はいいの？真央」

「うん。だって北元君の方がいいよ。」

潤は勉強が出来るだけだし。

北元君の方がずっと魅力的。

甲子園っていう夢を追いかけている北元君が好き。

潤は勉強以外何もないし。」

「あいつはホント勉強だけだしな。ノート代わりだな。」

あいつの気前の良さのお陰で宿題気にせず野球できるしなあ」

「そんなこと潤が聞いてたらどうするの？まー事実だけどね。」

「こんなところにこんな時間にいるわけないだろ？なんか2週間くらい前から俺達のこと避けー」

突然、健二は勢いよく転倒した。砂埃がたち制服が土まみれになった。

いや、土だけでない。

頭部から血を流し、襟元が鮮血に染まっている。

外灯の光が血まみれの健二を照らしている。

「北元君！！」

真央は悲鳴に近い声を上げた。

健二は頭に手をやり、自分の今の状況をようやく察した。

「血・・・血だ・・・！！畜生誰だ！！ただじゃすまさねぞコラア！！」

ベンチの後ろに立つ人間に健二は威嚇した。

暗くてよく見えないが、その人間はベンチをまたぎ一步一步健二達に近づいていった。

そして徐々に外灯がその人物を照らした。

その人物は他でもない潤だった。

「潤・・・！！おまつ！お前・・・！！」

「潤・・・！！」

手には拳二つ分の石を持っている。

その石には血が付着している。

健二は再度頭を触り、それは俺の血だと認識した。

真央は腰を抜き、健二は座ったまま後ずさりした。

潤は構わず一步一步、ゆっくりと健二に近づいていく。

「お前ら・・・俺をそんな風に思ってたのかよ・・・」

「ば、お前冗談だって！だから」

「不思議なもんだなー。ホント・・・意外とこういう時って冷静に入られるんだーな！！」

「ぐああ！」

潤は石を持った腕を振り下ろした。何度も何度も振り下ろし、その度に鈍い音がした。

自分の顔に噴水のように吹き付けられる血など気にせず、ただただ振り下ろした。

凶行（前書き）

7話目に続きちよいグロシーンあります。
苦手な方は・・・ほんとスミマセン；

凶行

気がつけばもうすでに健二は動かなくなっていた。

頭は碎かれ、まるで腐った果実から果汁が染み出ているようだ。

手を見ると、紺色だった制服の袖は血で黒くなり、カッターシャツは赤く染まっていた。

殺してしまった。

潤は目を見開き、健二の遺体を見つめた。

ここから逃げることもできず、四肢をがたがたと震えさせるばかりだ。

「きやあああ!!!」

真央の悲鳴が呪縛を解いた。

真央の方を振り向くと、いつもの笑顔の可愛い真央は消え、恐怖に怯え顔を涙でくしゃくしゃにしている。

真央は何度も何度も立とうと足を動かしているが、力が入らずただただ地面をこするばかりで立ち上がることは出来なかった。

潤はそんな真央にゆっくりと近寄った。

「ま、真央」

「いや・・・いやあ・・・」

真央は激しく首を横に振った。

真央に拒絶された。

その時潤の頭に悪魔が囁き掛けた。

一人殺セバ二人モ同ジ

潤は先ほどまで不安で押しつぶされそうな表情をしていたが、その囁きにより豹変した。

潤は真央の腕を掴み、真央を振り回し転倒させた。

真央はガチガチと歯を鳴らしながら必死に懇願する。

「お、お願い助けて・・・？」

黙ってるから！わ、わた、私なんでも手伝うから！は、早く遺体をー！！！」

潤は真央にまたがり片手で口を押さえた。

「お前が悪いんだ真央・・・！
あんなやつとあんな・・・！！
俺をバカに・・・！！！」

「んーんー！！んー！！」

真央は足をバタつかせ、手をバタつかせと抵抗するが、抵抗空しく容赦なく額に石を打ちつけられた。

先程真央も聞いた健二と同じ鈍い音が、自身の中で痛みと共に響いている。

潤は何度も何度も打ち付け、真央は目を見開いたまま絶命した。
涙と血液が混じり合い、真央の顔はますますくしゃくしゃになっている。

潤は真央と健二の血を十分すぎるほど浴びたのだった。

過酷なミニゲーム

なんてことをしてしまったのだろう。

ゲームとはいえ、人を殺してしまった。

通常のゲームだと敵を倒すと爽快なのに、これは実際に自分が殺してその感触がある。

血の生暖かさが気持ち悪い。

べつとりと制服についた血が気持ち悪い。

そして目の前の二体の遺体が・・・痛々しい。

潤は自分の手を見つめ、自分が今他人から見たらどんなやつなんだろうと考えた。

短慮な行動が招いた結果、俺は殺人犯になって、きっと殺している時の顔ときたら鬼のようだったろう。

いや・・・これはゲームだ。

これはこのゲームのイベントのようなもので、この殺人は必然的なものだったんだ。

俺の意思には関係なく、ゲームのイベントで起こったものなんだ。必然的だったんだ。

二人を殺した罪は、そう重く感じる必要はないのだ。

そう、これはゲーム。

さっさとこんな世界とおさらばしよう。

この世界で友人だった二人がもういない、こんな気味の悪いイベントが起こるこんな世界にもういたくない。

潤は立ち上がりしっかりした足取りで公園を去ろうとした。

しかし妙な気配がした。

はつきりもしない不気味な気配。

恐る恐る気配を感じる方を向くと、町内掲示板があるだけだった。

そこにはゴミの日や町内の行事の張り紙がされているだけで、誰が立っているわけではなく、ただ掲示板があるだけだった。

しかしその中に妙な張り紙がある。
一枚だけ白紙なのだ。

潤はじっとその紙を見ていると、徐々に文字と写真が浮き出てきた。
そしてその白紙だったものはハッキリしたものになった。

潤は驚愕した。

その紙は、自分のことを指名手配犯だと記している。
写真もある。

しかも『この顔にピンと来たら110番』ではなく、まるで西部劇
に出てくるような指名手配。

“WANTED”

“DEAD OR ALIVE”

目を疑った。

徐々に指名手配書は消え、新たに文字が浮き出てきた。
潤はボソボソと声を出して読んだ。

「ミニゲーム始動。

あなたは生死は問わない指名手配犯となりました。
多くの人があなたを狙います。

1日攻撃を避けながら上手く逃げてゲームをクリアしてください。
もしクリアできれば、この事件はなかったことになります。

この事件が起こる前の日に戻ります。

しかし死んでしまいますとゲームは終了します。」

ダアァン！！

読み終わると銃声が響いた。

そして同時に左腕に激痛が走った。

まるで電気が腕を這い回っているような痛み。

潤は右手で腕を押さえると右手にべっとりと血がついた。

これは健二の血でも真央の血でもない、紛れもなく自分の血。さっきまで見ていた掲示板にも、小さな穴が開いている。

弾痕だ。

後ろを振り向くと警官が銃を潤に向けていた。

「こ、こんなミニゲームあるかよ!!」

潤は茂みに入り、公園を突っ切り道路へ飛び出した。

孤独

潤は無我夢中で走った。

とにかく家に戻って現実世界に戻ろうと、そればかり頭の中をぐるぐる回っている。

その途中、10才ほどの少女とぶつかってしまった。

少女は小さく悲鳴を上げ、転倒した。

「わ、わりい！」

いや、なんでこんな時間にこんな子供が。

「・・・痛いなあ。仕返しにお兄ちゃん撃っちゃおっかな。」

その少女は突然拳銃を潤に向けた。

潤は弾の軌道からとっさに身体をずらしたが、肩にあたり貫通した。

『この子供も!?!』

潤は子供の拳銃を持つ腕を蹴り上げ、銃は空を舞った。

潤は子供を突き飛ばし、その拳銃を手にし再び走った。

その先々に色んな人間に出会った。

子供だけでなく、ステッキが刀になっている仕込み刀で襲い掛かる老翁老婆、金属バットで襲い掛かる高校生、ナイフを持ったサラリーマン。

出会った人間全員が潤の命を狙う人間で、潤を護ろうというものは一人もいなかった。

今までただ普通に生活してきたのに、突然ゲームの内容が変わったように感じた。

“ゲーム”としては、ゲームらしくてこれが当然の内容だろうが、自分が狙われる立場になるとは思ってもみなかった。

もし今の俺がゲームのキャラクターで、俺はテレビ画面の前でこれ进行操作しているのであれば、この軽やかに攻撃をかわしていく姿に俺は自画自賛していただろう。

このコントローラー捌きに惚れ惚れしていたかもしれない。

そうではなく、本当に自分が攻撃をかわしているとしても、今余裕があればこの運動神経に自画自賛していただろう。

だが、そんな余裕は全くない。

生きること必死だ。

一刻も早く家にたどり着き、現実世界に戻りたいと願った。

そして命からがら、ようやく自分の家に到着した。

普通なら慎重に開けるところだが、さっき言った通り余裕がない。勢いよく玄関をあけ、鍵を閉めて自分の部屋へ向かった。

家の中は薄暗く、足場が見えにくかったがそんなことを気にする余裕なんてない。

ドアを開け、起動した状態のゲーム機に駆け寄りヘルメットを素早く被った。

これでいつもなら意識がなくなって元の世界に戻ってるはず。

そのはずだ。

潤はそう強く念じた。

しかし期待に反して意識はなくならなかった。

いつもなら一瞬目の前が暗くなって、すぐに意識は元に戻って、掛かっている制服を見てゲームの世界か否か確認する。

そして今回、制服はN高校のままだった。

「な……んで……なんでだよ……なんでだよおお!!」

潤は狂ったようにヘルメットを被ったり取ったりの行動を繰り返した。

潤がこのような目に合っている間、現実世界でも騒ぎが起こっていた。

ずっと引きこもった息子を心配し、母は合鍵で部屋を開けた。すると奇妙なヘルメットを被り微動だにしない息子がいるではないか。

母は駆け寄り息子を揺すったが、その勢いで倒れこんだだけで反応はない。

頬を叩きながら何度も何度も名を呼んだがやはり無反応。

母は救急車を呼び、潤は意識不明の重体者として病院に運ばれたのだ。

もちろんヘルメットは外された。

潤はそんなことは知るよしもない。

潤はヘルメットをテレビ画面に向かって叩きつけるように投げた。

「この・・・不良品がああ！！くそお・・・！！くそおおお！！」

潤は狂気を帯びた叫びをあげた。

だがすぐに冷静さを取り戻した。

後ろから人の気配を感じ、振り向き、少女から奪った銃をぶるぶると激しく震わせながら構えた。

母親と父親が立っていた。まだほんの少し望みを持っていたのか、銃を構えたまま潤は二人に話しかけた。

「おふくろ・・・親父・・・助けて・・・助けてくれよ・・・」

こんなこと、現実世界でも言ったことがない。

しかも涙で顔をくしゃくしゃにしながら。

しかし期待空しく、やはり二人は潤の敵だった。

よく見ると母親は包丁を、父親はメスを持っている。

「殺人犯の親なんて恥ずかしい。」

「お前なんかいなきやいい。」

心に斧を激しく打ち付けられた気分だ。

潤は心を爆発させた。

「うああああああ！！！！」

悲痛な叫びと共にドンドンドンと六発の銃声が部屋に響いた。

同時に母親と父親はその場に倒れ、動かなくなった。

潤は両親の方を振り向くことなく窓から木を伝って外へ飛び出し、再び走った。

どこへ向かうわけでもなく、ただひたすら走り続けた。

終幕

いったいどこまで走ったのだろうか。

そしてどこへ向かっていったのだろうか。

潤はとにかく早く1日が終わって欲しいと、現実世界にいた時以上に強く願った。

フラフラになりながら学校らしき場所にたどり着いた。

潤は学校名を確認せず、まっすぐ校舎へ向かって歩いた。

「もう・・・ここに隠れよう。ここに隠れて1日を凌ごう。」

その時、辺りが急に明るくなった。

潤は驚き顔を上げた。

校舎の屋上から無数の光が潤を照らしている。

あまりの眩しさに潤は顔をしかめ、手で光を遮り辺りを見回した。
見たことのある校舎。

そこはS高校だった。

潤が嫌っていたS高校。

いつの間にか見知った通学路を走っていたのだ。

「最後の最後にたどり着いたのはここ・・・」

「銃を捨て、手を上げろ!! お前は完全に包囲された。」

「うるっせえええ!! 撃つぞコラァ!!!!」

潤は拳銃を警官隊に向けた。

しかしそんな抵抗は意味がないものだ。

ぐるりと辺りを見渡すと、正門には十数人の警官隊が拳銃を構え、

上にはライフルを構える警官隊がいる。

中には一般人も混ざっている。

野次馬ではなく、潤の敵として集まっているのだ。

自分が劣勢なのは目に見えている。

潤はそれでも生にすがり付こうと、必死に助かる道を頭の中で探した。

『思い出せ。何か見落としているんだ・・・これはゲーム・・・これはゲームだから・・・そうだルールだ。説明書を思い出せ。』

潤の頭にある一節が過ぎった。

“命を落とせばゲームオーバーとみなし、意識は自動的に現実世界に戻ります”

必死に逃げ回っていたが、これは所詮ゲームで、ここで死んでも現実世界に帰るだけなのだ。

ゲームのルールを忘れていたが、思い出すと同時に冷静になった。

潤は拳銃を1mほど先に放り投げ、高笑いをした。

「あははははは！！！！撃てよ・・・俺はこの住人じゃねーんだお前らと違うんだよ！！ここで死んだって俺は俺の世界に戻るだけだ！！！」

痛みは腕や肩を撃たれた痛みとは比べ物にならないだろうが、ここで逃げ回るよりさっさと現実に戻った方がいい。

潤は急かすように撃てと叫び続けた。

ゲームのルールを思い出してよかったと、潤は表情には出していないが安堵していた。

そして次から次へとゲームのルールを思い出していった。

しかし高笑いがピタリと止まった。
先程の潤とは打って変わって表情が曇っている。

“ゲームを終えたければ、ゲームの世界で、このヘルメットを装着してください”

“現実世界でヘルメットは絶対取らないでください。ヘルメットは命綱のようなものです。”

「じゃあ・・・さっき戻れなかったのは・・・」

“へるめっとハ命綱”

「・・・・・・・・こっちで死んだ俺の意識はどこへ・・・・？」

「構え!!」

警官隊の一人の号令と共に、みな拳銃やライフルを構えた。

“絶対取ラナイデ”

あの時現実世界に戻らなかったのは――

現実世界の俺が――

「撃つな！！撃たないで―」

「撃てえええ！！！！」

潤の悲痛な叫びは銃声にかき消された。

G
A
M
E

O
V
E
R

「おい達雄、何やってんだ？」

達雄と呼ばれた男は後ろを振り向いた。

達雄は声を掛けてきた男と向き合いニヤニヤと笑った。

「悟、見てわかんねー？」

そう聞かれて悟と呼ばれた男は今の光景をまじまじと見た。

ここは町のそこら辺にあるゴミ置き場の一つで、達雄はそのゴミ置き場を漁っている。

この光景が悟の見たままの光景だ。

悟は率直に答えた。

「ゴミ漁り。」

「正確に言うと掘り出しモン探した。人を変人みたいに言うなよ。」

「いや、側から見たらただのゴミ漁りだって。」

誰も『あ、あの人が掘り出し物を見つけてるんだ』なんておもわねーよ。

だからさっさとやめろよ。

恥ずかしくねえの？」

「だって、これ見ろよ」

達雄が手にしているものは人気のゲーム機、PS2の本体だった。悟はさっきまでの発言とは裏腹に、興奮し声を上げた。

「マジかよ！

勿体ねえなあ売ればいいのにさあゝ。

捨てる奴いるんだなあ」

「俺欲しかったんだよねあ〜。」

「ご丁寧に、ソフトもこんなにあんぜ?」

達雄は大量のゲームソフトが入った箱を持ち上げ、悟に見せた。その箱を除く悟の目が輝いている。

注意していた悟もだんだんこの話に乗ってきた。

「なあ、いらぬやつは売って、面白そうなやつはやろうぜ?」

「そうだな!」

元々捨ててるもんだし、貰ってもいいよな!」

「それは?」

「一応P Sのロゴマークついてっけど?」

悟は“それ”を指差した。

それは確かにP Sのロゴマークが入っているが、通常のゲームソフトのケースより何倍も多く、しかもA3サイズほどの箱だ。そんなケースは見たことない。

「何てゲーム?」

「えーっと・・・タイトルは―」

“ 人生ゲーム ”

終幕（後書き）

最後までお付き合いくださりありがとうございました。

文章を書くということは大変難しい事だと痛感しました；

アドバイスクださった方々、ありがとうございました。

アドバイスを取り入れてまた頑張って新しい話を書きたいと思います。

いつになるかわかりませんが、またお会いできたらいいなと思います。

その時も是非ビシッとお願ひします（笑）

それではこれで失礼します。

本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6851a/>

人生ゲーム

2010年11月2日09時47分発行